釧路市立北中学校「学校だより」

北　魂

令和７年（2025年）７月７日発行　VOL 14

授業づくりの思考

釧路市立北中学校長　冨　田　直　樹

２日（水）に釧路市内の全ての小・中学校において「小中ジョイントプロジェクト」に関する取組が行われました。中学校区の小学校、中学校が連携して各種取組を推進します。本校では昨年度から中央小学校と青葉小学校の教職員の皆さんに参加していただいて校内授業研究会を行っています。今回は辻川教諭が１年１組で数学、高柳教諭が１年２組で社会、中谷内教諭が３年１組で美術、山本教諭が３年２組で国語、田村教諭が特別支援学級で自立活動を公開しました。それぞれの授業を本校、中央小学校、青葉小学校の教職員が参観し、その後、参観した授業についての成果と課題を明確にして、授業改善に向けた協議を行いました。最後に、釧路教育局の近藤拓也指導主事と釧路市教育委員会の関本裕介指導主事から授業づくり、授業改善について指導助言をいただきました。小学校の教職員の皆さんの授業づくりの見方・考え方、近藤指導主事と関本指導主事の現行学習指導要領や次期学習指導要領改訂の趣旨等を踏まえた指導助言は、私たち中学校の教職員にとって新しい視点を発見する貴重な内容でした。生徒たちが自立した学習者になるための授業改善に確実に生かしていこうと考えています。近い将来、義務教育学校や小中一貫教育校が一般的で、単独の小学校、中学校が珍しくなると思います。昨年度、そして、今年度の北中学校区の３校の取組は、未来の学校の姿を体現したものであると言えると思います。

さて、数年前、ある小学校を訪問し算数の授業を参観しました。教師が子どもの発言を受け止めることができず、指導案で予想したとおりの発言をさせようとしていました。課題は小数の足し算で簡単なものでしたが、子どもは何を求められているのか分からず、複数の子どもが机にうつ伏せになってしまいました。指導案はきちんと書けているのに、なぜそんな授業になってしまったのか、研究主任の教員に尋ねたところ、授業者は校長が指導するとおりに指導案を書き換えたことが分かりました。理解が不十分なままに学習指導案を書き上げた授業者は、その学習指導案のとおりに授業を実施し、先ほどの状況に陥ってしまいました。

国立教育政策研究所の総括研究官である千々布敏弥氏が著した「先生たちのリフレクション」に、授業づくりの「３段階リフレクション」が示されていました。ここでいうリフレクションは「思考」という意味です。マニュアルに従って授業をつくる思考を「技術的リフレクション」、自身の試行錯誤の中から授業をつくる思考を「実践的リフレクション」、その背景となる理念や目指す子どもの姿を明確にして授業をつくる思考を「批判的リフレクション」というそうです。

校内授業研究会において授業を公開した５名の教師は「実践的リフレクション」と「批判的リフレクション」を基盤にした授業をつくっていました。私たちは生徒たちが自立した学習者になるために授業を行っています。そのために「実践的リフレクション」と「批判的リフレクション」を駆使して授業づくりを繰り返すなど、まずは私たちが「自立した学習者」になっていく必要があるのだと思います。